

2000年(平成12年)1月18日(火曜日)



現地の住民らとも知り合い、多くの友情が芽生えた

共生目指して

台湾・玉山登山行

▷下

二十八年前の夏、私は台湾の山の中で、仕事を手伝いながら現地の部族の家族と一カ月を過ごした。

日本を出

発する前、

その家族に

台湾再訪問

の手紙を出した。折り返し、八十歳になるお父さんから、「とにかく来い。皆待っている」という電話が入った。

下山後、目指す家の近く

提起

で歩み出てきた。お母さんも玄關口で、「ここ何日か落ち着かなかったよ」とほほ笑んでいる。美人三姉妹も仕事を切り上げて賑わってくれた。帰郷のような思いだった。

「『冒険者』と言っただけ、ここでは。皆元気で頑たちにも、気持ちよく、自

持ちつ持たれつの旅

丈そつだし、問題ないね」。然に受け入れてもらえた。お父さんはそう言うけど、ケラケラ笑っていた。国際政治の舞台で、台湾の位置は微妙だが、世界の中の顕微鏡的一点に懐かしい山川があり、くつろげる家族と家と隣人がいる。このせいで話になったお父さんが笑顔

目を向けない人たちが、一部の倫理を失ってしまつた人間の方に

まつた福祉に携わる関係者

いづれも問題だ。

彼らの旅は、われわれに

さまざまな問題を突き付けている気がする。われわれ

の感受性とセンスが、不断

に問われ、試されていると

感じた旅だった。

(金谷透)